

日時：平成20年 6月11日(水)  
場所：川崎医療福祉大学 10階 大会議室

## オックスフォード留学報告

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科 准教授 飯田 淳子

### 講演要旨

川崎学園と提携関係にあるイギリス、オックスフォード大学のグリーン・カレッジに、2006年7月末から1年間、客員研究員（Visiting Research Fellow）として留学した。以下、筆者が所属していたグリーン・カレッジと社会文化人類学研究所について概説した上で、オックスフォード大学の教育・研究・運営のあり方について、若干の報告と所感を述べたい。

#### 1. グリーン・カレッジ

オックスフォードとケンブリッジの学生や教員は、自分の専門の学科（department）だけでなく、カレッジというものに所属している。学科が学問上の拠点だとすれば、カレッジは生活面での拠点といえるだろう。カレッジには様々な学科・学部、専攻の学生や教員が所属している。聖職者たちの学問の場として始まったオックスフォード大学では、かつては学生も教員も皆カレッジで生活しており、現在でも多くの学生はカレッジの寮に住んでいる。ただし、学期中にはカレッジのメンバーによるレクチャーなど、学問的な活動も行われる。学生達には学科の指導教官の他に、カレッジ・アドバイザーがいる。2008年6月現在、オックスフォードには39のカレッジがある。

1979年創立のグリーン・カレッジには、学部生はおらず、医学をはじめ、医学史、社会政策、環境科学、人類学などを専攻する300人強の大学院生およびフェローと呼ばれる教員・研究者が120人所属している。筆者を含め、川崎学園からの教員は留学中、グリーン・カレッジのリサーチ・フェローという身分を与えられる。カレッジのメンバーになると、施設を使用できる他、カレッジで行われるさまざまな行事に出席することができる。カレッジでの生活や行事は、メンバー間の学術的・社会的交流において重要な機能を果たしている。

#### 2. 社会文化人類学研究所（ISCA）

一方、筆者の学問的な拠点は社会文化人類学研究所（ISCA）であった。イギリス社会人類学の始祖たちがいた歴史のある当研究所では、筆者が滞在した当時、40人程度のアカデミック・スタッフが研究を行っていた。この研究所では大学院教育も行われており、社会人類学、医療人類学、映像人類学、移民研究、博物館学などのコースがある。筆者は自分の研究を行うのに加えて、このISCA等で開かれるセミナーや研究会に出席したり、大学院の講義を聴講したりしていた。

#### 3. 教育

オックスフォード大学の学年暦は、10月上旬から12月上旬までのMichaelmas Term、1月中旬から3月中旬までのHilary Term、4月下旬から6月中旬までのTrinity Termの3学期に分かれている。各学期は8週間で、Michaelmas Term第1週の前の週はオリエンテーションに充てられる。学期の期間は日本より短いですが、さまざまな活動がこの期間に集中して行われる。

学期中、学生たちは講義に出席し、課題に従ってエッセイ（レポート）を提出し、それに関するチュートリアルを受けるということを毎週繰り返す。チュートリアルとは、オックスフォードとケンブリッジに特有の、一種の個人指導である。それに先立って提出されるエッセイは採点されないが、その後にチュートリアルが控えているため、ある程度の水準のものを出さなければならない。そしてエッセイを書くには講義の内容を理解し、各講義で配布されるリーディングリストの膨大な量の文献を読まなければならない。講義では出席などとならないが、エッセイの提出とチュートリアルを義務付けられている学生たちは講義に出席し、文献を必死で読む。

試験は年度の終わりに行われる（修士の院生も受けなければならない）。学生たちは数人でグループを作り、6月の試験のために4月ごろから勉強を始める。試験当日はタイとガウン、革靴の着用を義務付けられる。人類学の学生たちは、1日3問の論述形式の問題に3時間休みなしの状態で解答する。これが4日間続く。解答

の際には鉛筆ではなくボールペンを使わなければならない。公正さと一定の教育レベルを維持するため、試験の採点は外部者に委託して行われる。特に優れた成績を取めた学生には「ディステインクション」という賞のようなものが与えられる。これは履歴書にも書けるほど名誉なものとされている。

#### 4. 研究

オックスフォードといえども、正直言って玉石混淆だった。また、イギリスの他の大学やイギリス以外の欧米諸国から来た人々は、オックスフォードの研究者には保守的で arrogant な人が少なくないとよく言う。しかし、滞在中は本当に多くのことを学んだ。オックスフォードにいと、良くも悪くも研究へのプレッシャーがある。彼らは知人や友人に会うたびに研究の進捗状況を尋ねる。それも「研究はどう?」というような漠然とした質問だけでなく、「今、何をやっているの?」というような、具体的な質問をする。オックスフォードの教員たちも、学生指導やアドミニストレーションに多くの時間とエネルギーを費やしているが、彼らの関心と生活の中心は研究なのである。カレッジで話をする相手は他分野の専門家ばかりだが、例えば筆者が本を読んでいると言うと「それで何がわかったの?」などという質問が返ってくる。

欧米の研究者には、こういったプレッシャーに打ち克っていくためのバイタリティのようなものを感じる事がよくあるが、彼らの中にも精神的に病んでいく人が少なくない。そのなかでやはりストレスマネジメントが必要になる。実際、彼らの生活にはメリハリがある。いくら忙しくても週末は息抜きをし、夏・冬（クリスマス）・春（イースター）に休暇を2週間ぐらいつつしっかりとる。また、先述したように授業期間が短いため、それ以外の期間に集中して研究時間をとることができる上、サバティカルを7年に1回（1年間）あるいは7学期に1回（1学期間）とることができるといった意味でも、研究環境が整っているといえる。

もう一つふれておきたいのは、オックスフォードで研究の話をしていてよくある「問いは何? (What's the question?)」という質問である。このシンプルで鋭い質問は、具体的な枝葉末節はさておき、その人の研究の核となる問題関心を明らかにしようとするものである。これは特に、カレッジなどでの会話で、分野の異なる人の中でよく聞かれる。相手の分野に関する専門的な知識がなくても、このように問えば、その人の研究の基本的なところとその意義を理解できることがある。当然、そう尋ねられた者は相手が理解できるように、端的に説明する必要がある。一方、その「問い (question)」に対する「答えは何?」という質問は、あまり聞かなかった。答えは簡単には得られないということなのかもしれないが、研究においてより重要なのは問いであるということを表しているような気がした。

#### 5. 運営

運営に関して一番のテーマは、オックスフォード800年の伝統を保持しつつ、時代の変化にいかに対応していくかということであるように感じられた。例えば筆者が滞在中、オックスフォード大学運営に関する改革案について、教員による投票が行われた。この案は副総長によって提案されたもので、具体的には、University Council の構成メンバーを現在の26人から15人に減少させ、その大部分を学外のビジネス・マネジメント専門家によって構成させるというのが主な変更点である。これが実現すると、チュートリアルやカレッジなど、従来の「非効率的な」システムを存続できなくなるのではないかと、潤沢な資金を持ち込んでくれる留学生を多く受け入れることになるがそれはどうか、等といった懸念があるという。実はイギリスのほとんどの大学ですすでにそのようになっているらしく、ケンブリッジでもそうなるのは時間の問題といわれているようだ。この日、28人の論者による合計3時間のスピーチの後、投票が行われた結果、730対456で反対派の票が上回った。また、その後、3770人の全教職員の郵便による投票が行われた際にも反対票が上回り、今のところこの案は実現される見込みはないようである。

しかし、変化は確実に進んでいる。川崎学園と提携を結んでいるグリーン・カレッジは、今年10月からテンプレトン・カレッジと合併し、グリーン・テンプレトンカレッジとなる。テンプレトンはビジネス・スクールの教員や学生が多く、経済的には豊かだが、カレッジの用地や建物が不足しており、資金不足に悩むグリーンとの利害が一致したようだ。カレッジの合併はオックスフォードの8世紀にわたる歴史上、はじめてのことだという。

以上、簡単ではあるが、報告をさせていただいた。留学にあたりお力添えいただいた諸先生方からのご支援に答えるためにも、学んだことを無駄にすることのないよう、今後とも教育・研究活動に邁進していきたい。